

## あ と が き

平成26年6月21日、カタールのドーハで開催されていた世界遺産委員会において「富岡製糸場と絹産業遺産群」は満場一致で世界遺産として議決され、同月25日に同資産は世界遺産一覧表に記載された。これを追うように重要文化財に指定されていた物件の中から繰糸所、東置繭所及び西置繭所の3棟が国宝に指定された。富岡製糸場はわが国の近代化を推し進めた金字塔としての評価が付与されたのである。

このような慶事に即応するように大きな変化のあったのが見学者の急増である。特に秋の連休の日には一日9千人を超えるような賑わいぶりで製糸場課の職員はもちろん解説員まで総動員で見学者の対応に当たらざるを得ない日々が続いた。

これがために本務とすべき調査研究活動などの時間の確保もままならず、しばらくの間はたなざらし状態であった。しかしこれを理由に言い訳はできないという気持ちから念願の「ボネとトミオカ」の企画展も立ち上げ、フランスのリヨン近郊のボネ撚糸及び製糸工場における工女の厳しい躰や労働実態と富岡製糸場の関連性を資料で展示し、新しい見地からの研究の成果が得られた。フランス側の資料の翻訳は製糸場課に配属されている国際協力員ダミアン・ロブション氏にお願いした。

このような経過の中で報告書の作成に取り組んだのである。道のりは決して平坦ではなかった。時には休日自宅の書齋いっぱい資料を広げ資料の集約に励んだこともある。こうして刊行されたのが今回の報告書である。したがって本報告書は執筆者にとっては従来の報告書とはまた異なった感慨をもたらしたものと思われる。

今回は4本の論文からなっている。執筆者の継続研究的な視野から今まで不分明な部分を追究した成果が見えている。

前述の如く富岡製糸場は世界遺産となり、また創業当初の中核である3棟が国宝に指定された。さりながら調査研究はまだ完了した段階ではない。今後これを追い求めていくことが当センターの一つの大きな使命であることを再認識しながら、今回の報告書をお読みいただければ幸いです。思う次第である。

平成27年3月

富岡製糸場総合研究センター

所長 今井 幹 夫